

4 いなぐんが 伊那郡衙

古代伊那郡の「みやこ」を歩こう



恒川遺跡群

ごんがいせきぐん

恒川遺跡は、奈良・平安時代に伊那郡（現在の下伊那郡～伊那市周辺）の役所（郡衙または郡家）があった場所で、1982年（昭和57）からの発掘調査によって、その姿がだんだんと明らかになってきています。

郡衙は政治の中心で、人々の生活と結びついた多くの役割を果たす、とても重要な場所でした。また、郡の最先端の文化が真っ先に入ってくる文化の中心地でもありました。近くには「座光寺」という地名のもとになった「寂光寺」というお寺もつくられています。郡衙では、前の時代に大きな古墳を造っていたような豪族たちがなった郡司という役人たちを先頭に、たくさんの職員が務めていました。多くの人々が集まる郡衙は、地域の中の「小さな都」といえるかもしれません。

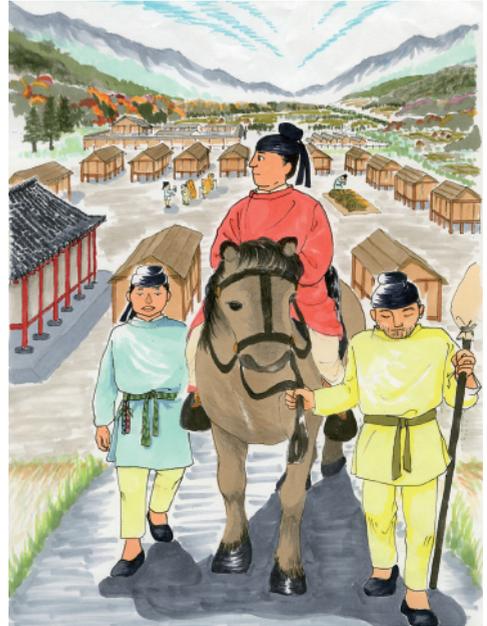
この周辺は古墳時代から豪族たちの拠点となっていて、東国の玄関口にも位置し、陸や川の交通の上でも重要な場所だったことから、ここに伊那郡の「みやこ」がつけられたと考えられます。

恒川遺跡の発掘では、税の稲などを納めた倉庫（正倉）や、役人や行き来する使者が泊まったり休んだりしたと思われる建物（館）などがたくさん見つっています。当時の農民たちは、ふだん目にしないこうした大きな建物を、おどろきながら見上げていたことでしょう。

恒川遺跡では、硯・刀子（小刀）・帯（ベルト）の金具・木簡など、役人の仕事に関係あるものや、瓦・緑釉陶器（緑色の焼き物）・三彩陶器（三色の焼き物）・お金（和同開珎銀銭・富寿神宝）など当時としては珍しかった

た品々も見つっています。最古のお金の富本銭もこの近くから見つっています。これらのものからも、郡衙がこの地方でもっとも大切な場所であったことがわかります。

（村史89P～116P ふるさと～72P～74P）



正倉院跡

しょうそういんあと

伊那郡から集めた税（稲など）を収納した10棟以上の倉庫（正倉）の跡や、その周りに造られた大きな溝跡が見つっています。炭化米（焼けたお米）が倉庫跡からも溝跡からも出ています。溝跡からは瓦（軒丸瓦）が出土しています。



炭化米

軒丸瓦

和同開珎銀銭（県宝）

わどうかいちんぎんせん

和銅元年（708）、日本で2番目に作られたお金で、銀と銅の2種類があります。ここで見つかった銀銭は東日本では発見例が少なく、この伊那郡が中央とつていかに大切な地であったかを示す貴重なものです。



墨書土器「厨」

ほくしょどき「くりや」

役人の食事、宴会、儀式などで使われる「厨」と書かれた、9世紀後半（平安時代）の器が見つかりました。郡衙に厨があったことがわかります。



推定「館」跡

すいてい「たち」あと

「館」は国司や使者の宿泊所として使用したところです。一般集落跡と異なる大形掘立柱建物跡、長方形の住居溝跡、墨書土器「信」（信濃）や「官」が見つかり、「館」があったところではないかと見られています。



恒川清水

ごんがわしみず

縄文時代から周辺に人が住み、昭和50年ころまで豊かな水があふれ、農業や生活に利用されてきました。伊那郡衙の祭祀の場として機能し、付近から木製祭祀具や木簡が見つかっています。



田中・倉垣外地籍の建物跡

たなか・くらがいのち
せきのたてもあと

恒川遺跡南端の平坦地に、一辺が13mもある長大な竪穴住居跡や大形カマドのある、奈良時代としては大規模な建物跡を含めて、20軒以上の大きな集落が構成されています。和同開珎銀銭、富寿神宝、円面硯（すずり）、三彩陶器など普通の人では手にできないものが出土しており、郡司など有力役人に関する建物跡ではないかと考えられています。



緑釉陶器



木簡



こんどうそうおびかなく
金銅装帯金具



三彩陶器



円面硯